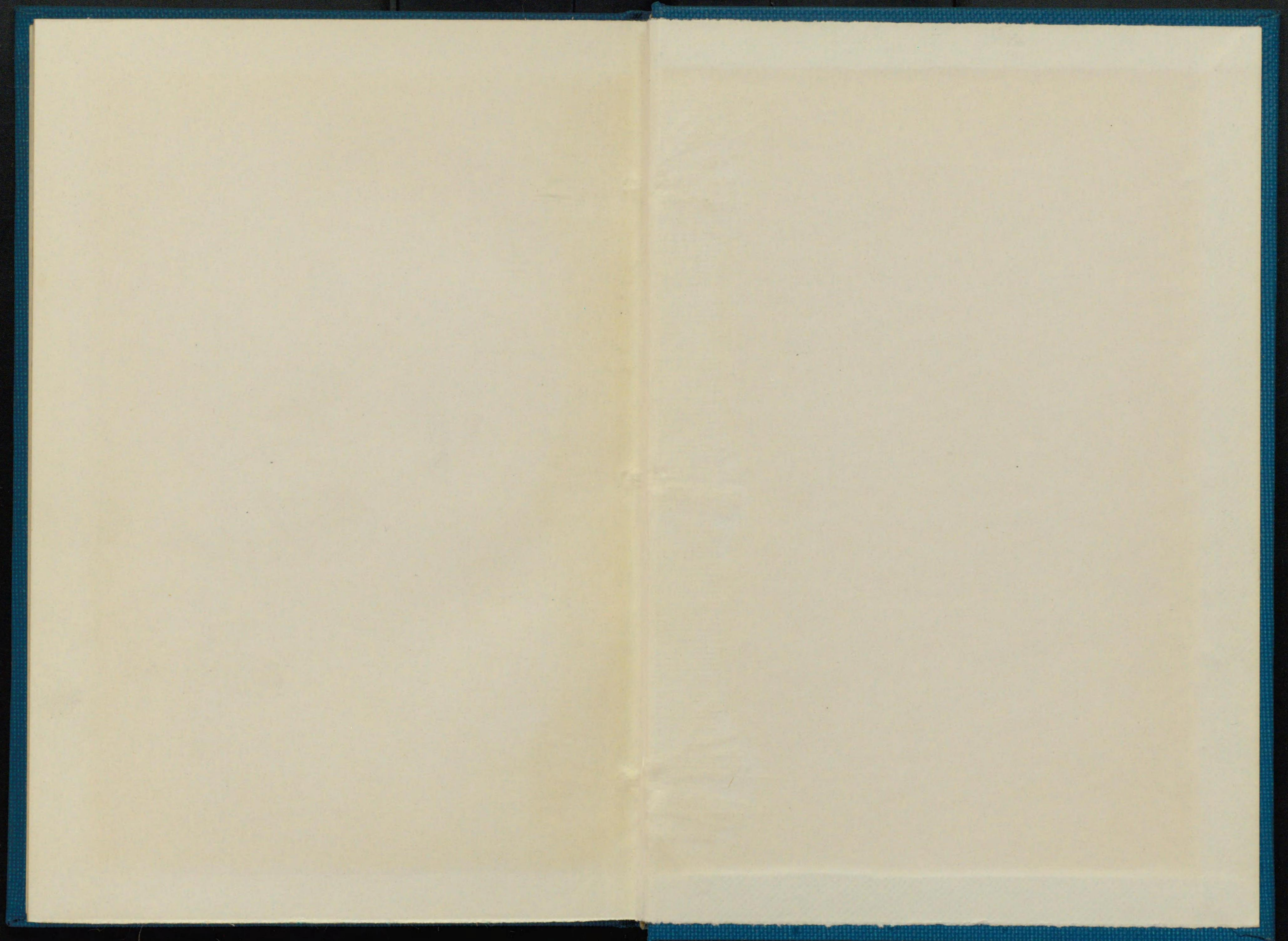


699-128



1200501582008





窪

田

空

穂

著

郷

愁

書物展望社版



699
128

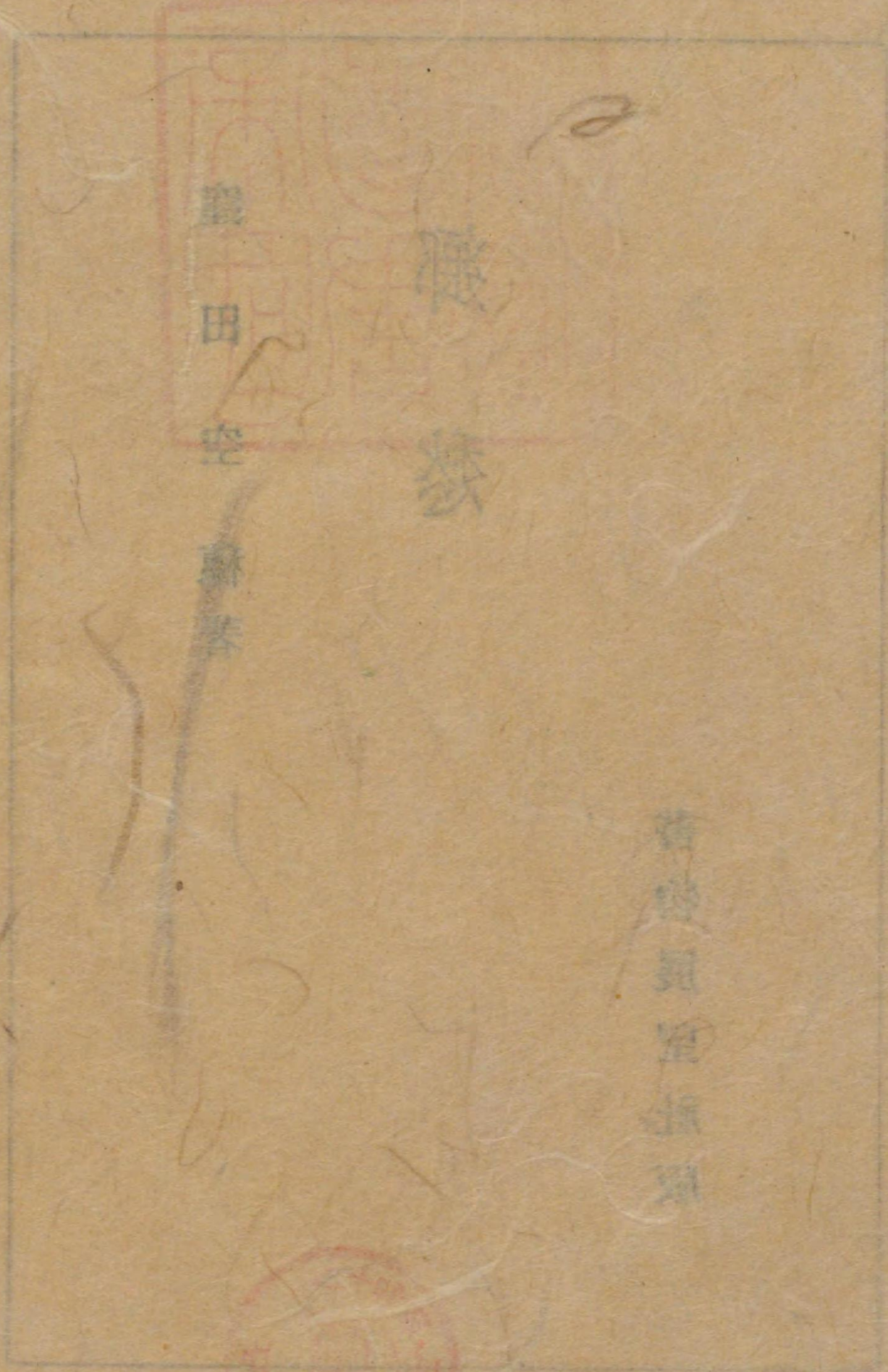
郷愁 目次

昭和九年 長歌二百七十一首 三

早春の夕焼、鳥屋、天麩羅、路上、初一念、打ち身、伊豆長岡、
相模西秦野村、花壇、友を悲しむ、富士の裾野の鳥、牛込榎町、
無花果、埼玉の農家、川崎杜外を憂ふ、南武藏、松茸、野の寺、
伊香保、霖雨晴る、深大寺

昭和十年 長歌二百五首 八五

浦賀、小著、或時、亡友、病臥、噫道遙先生、子病む、櫻、千川
菜萸、梅雨期、姉、金、友、舊友、晚涼、杜外の歌碑、雨久し、
四萬、河原湯、時雨、豊島園、或日、友と語る、註釋書、信濃柿



眞心、牛肉、友に寄す、歳末に、除夜

昭和十一年

長歌二一首
短歌二百五十首

元日、友の家、餅、折々に、蟹、寒木瓜、寒派、時事を見て、附合、春の土、庭の木瓜、沈丁花の垣、就職難、病妻、童、折々に、初夏の花木、五月雨、青年天折す、雛芥子、誕生日、庭、故郷、市岡不傳居士、相模二の宮海岸、賀延、嫂か言、義齒、颱風、物欲、柿、目白臺新坂、町中の山野、伊豆古奈温泉、丸の内、冬の庭、除夜

後

記

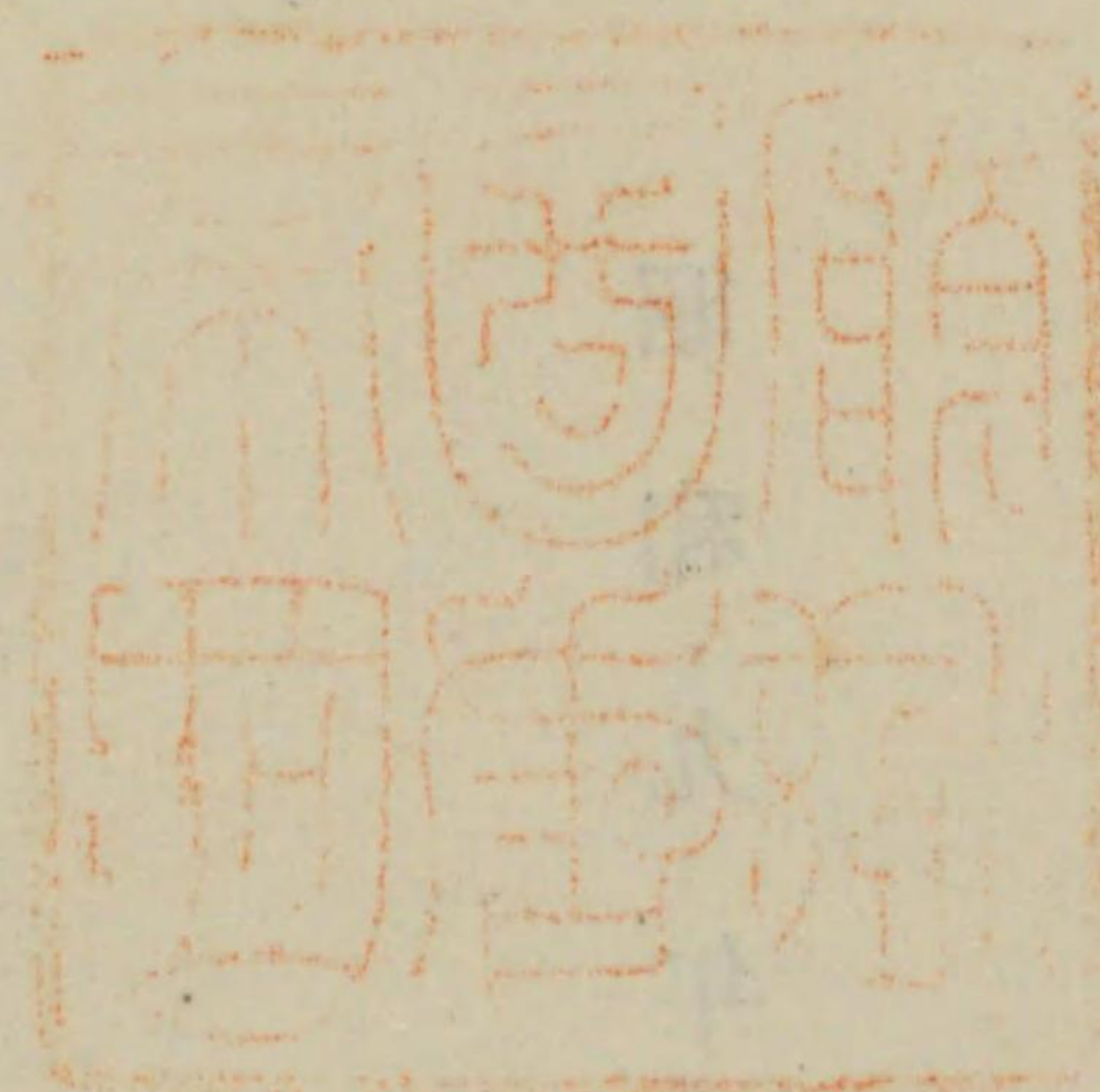
郷

愁

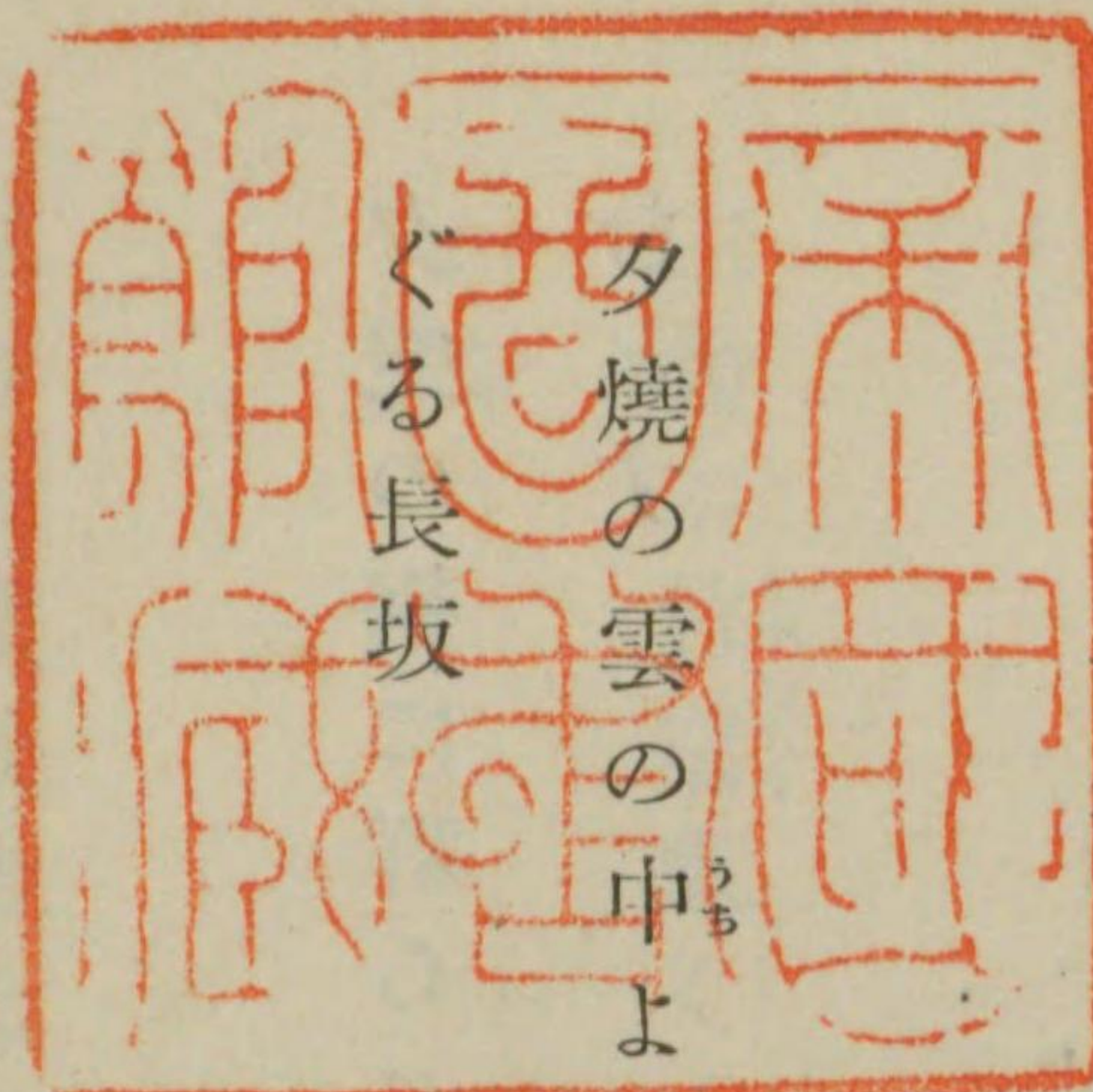
昭和九年

長歌
短歌

二百七十一首



早春の夕焼



夕焼の雲の中より人出でぬ登らむとして見あ
くる長坂

大槻の冬木の枝の細かきを透きては見ゆる夕

焼の雲

高き屋の窓のガラスにさす夕日赤く閃めく暮
れゆく空に

4

夕空の裾に群らがる茜雲色やはらぎて春なら
むとす

スエーター赤き童^{わらわ}べ夕焼の雲を望みて坂駈け
のぼる

鳥屋

三疊の竹筵^{たかむしろ}敷く小さき室池^{しつ}みづ浅く緋鯉うご
かぬ

枯れ松葉敷きたる庭の飛石^{とびいし}の續きて盡きぬ水
寒き池に

5

敷き松葉抽き出づる木賊懇ろに藁もて括れり
五株ばかり

6

いささかの炭火もて煮る雞の肉春寒き室しつに匂
を立つる

天 麩 羅

車海老嚙むに感ずる味ひを愛でつつ見やる共
に食ふ人

芝海老に貝柱まじる搔揚げの細かき味よ静か
に食はむ

7

天麩羅の甘うまかりしよと我がいへば人の頷く食
ひ終へて後

路 上

坂下さかしたの冬木にまじる雪の屋根晝空青く垂れ下
りたり(大塚仲町にて)

人繁き小路こうぢに立ちて二少女ふたをとめ白き掌て合せて石佛いしほとけ
拜む(浅草公園にて)

わが父のちんどん屋にておはしなば悲しから
むとちんどん屋見つ

初 一 念

損得は知らざりし日の初一念宿命の路を歩む
に老いぬ

廣き世に狭き心を持ちて生き生きの嘆きをし
にけり我は

厭ふべき身よと泣く日も曾てわれ人を羨む心
はなかりき

12

人の身のさみしと思へかへり見て悔ゆる心の
ありとはいはじ

打ち身

、春の芽の庭の木草に青む日を古き打ち身の肩
にうづき來ぬ

その時に死ぬべくも我がありけるを怪しく生
きて今日に至りぬ

13

うづき来る肩の打ち身に手をやりて暖き日の
今日を侘びゐる

伊豆長岡

温泉宿

松山にまじりて咲ける櫻花壘を照らす室に我
が来ぬ

山松にまじる櫻の怪しくも明るさ餘れ見るに
静けき

16

山松の緑穿ちて咲きつづき照り渡る花の紛れ
なむとす

湯疲れの身を横たへて外とを見れば眼に平らかに
花の梢揺らぐ

山松にまじる櫻の花の奥夕べとなれば灯のと
もりけり

峽の小路

松山の峽にかがやく老櫻うすくもる空梢に懸
かる

17

松山の幽かにしては深き音止まらずも聞くか小
さき此の家

田中の堂

打渡す冬田の中、古御堂ふるみだう小さきが前に、ただ
一本立もとてる老松おいまつ、枝すべて伐られし幹の、荒

ららかに怪しくくねる。此の空に俄に繁く、
こぼれ来る小鳥の聲や、ひそやかに口疾くちとき聲
の、甲高かんだかに媚めいびたる聲の、何處いっここより来るやと
見れば、とまり木の無くてえあらぬ、小鳥ど
も止とまる木を無み、松の幹太きめぐりて、す
がり着のぼき上り下りつつ、鳴くにぞありける。

北條時頼の墓

案内する長岡人のさみしくも最明寺殿の墓ど
ころ知らぬ

最明寺寺裏にしてささやけき五輪の塔を苔に
見出でぬ

墓見れば最明寺殿身に近くいます覺えて賽錢
ささぐ

葦山の反射爐

山裾の櫻が中に花よりもやや高く立つ反射爐
の筒

反射爐のこの爐二つや幕末の我が日本の兵器
廠なる

一人の太郎左衛門を國舉り頼みける日の遠く
はあらぬ

江川邸

此の家や今を遡る八百年保元の御代に建てに
けるとぞ

頼朝が蛭が小島に下りし日既にありける此の
古家か

此の家の真中に立てる生柱紙四手白く注連張
り渡す

大竈おほかまど二つ並べる廣き土間よろ鏝へる家の子ここに
集ひけむ

24

圓柱まるばしら並び支ふる屋根裏のあやしく高く棟に極
まる

相模西秦野村

谷弼君に伴はれて、その郷里なる
西秦野村千村の家に客となる。

千村途上

麥畑につづく菜種畑花の照り中道行けば眼まなこま
ぶしき

25

丈に餘る秦野の菜種花繁く畝間をさへに黄と
はなしたる

26

目くるめき菜種の花を潜る虻空は霞みてほの
白く照る

耳に入るかそけき聲を空にとめ仰ぐ霞はすべ
て雲雀なる

ほの白き空の霞に隠れては何に口疾く物いふ
や雲雀

形見ねば雲雀とはいはじ艶持ちてひそめく聲
の零れ落つるのみ

郷土の馳走に預る

27

此の里のうまき物とて蕎麥餛飩草餅並べ食べ
よと勧むる

稗まぜし草餅口の嬉しがり猶と甘ゆれど腹は
ふくれぬ

手打ち蕎麥うましといひて代へけるが老いし
客人^{まろ}食べ餘しけり

丘に登る

日あたりの若葉ほぐるる檜山にあな珍らしや
ちごちごの花(ちごちごは翁草の異名にて我が郷里にての名なり)

屈みてはしみじみと見る春山に紫細かく零れ^{こぼ}
渡る花

日あたりに群らがり生ゆる若蓬撫づる手冷たく香を立てにける

ほの白く照り渡る霞四方よもに垂れ眞北の空や朧なる山

ほの白き霞の奥におぼろかに高く豊けく大山おほやまの見ゆ

今日を見る大山山塊ほの白く霞に溶けて差別あらずも

低山の裾を繞りて萱屋根の黒き家群いへぐら絶えつつ
續く

西の方展かたひろくる廣野菜種もて黄に照らさする岡の村かも

花壇

無かりしを有らする樂しさ思ひつつ良き土求め得て花壇を造る

喜びて花壇造れる若き子等造る即ち忘れしが如し

花草の丈低きをと定めては貪り植うる得るがまにまに

知る花は親しくてよし知らざるが咲きいづる待つは勝りて樂し

この蕾開かばと植ゑぬ青き珠の白さ吐かむとする山芍薬の株

吾亦^{われも}香^{かう}の苗を植うなり秋日さし寂びたる花の
咲かむ描きて

34

來む春はここに咲かむと翁^{をん}草花過ぎたるを懇
ろに植う

萱草^{かんざう}を移し植ゑむかわが目には君子蘭より親
しと見ゆるに

姫虎^{ひめとら}の尾^を伸びゆく末に花持ちてうす紫の紛れ
つつ咲く

春龍^{はるりん}膽^{どう}萎れてさみし代ふるべく何をか植ゑむ
その傍に

目を寄せて見るに漸く見ゆる芽の細かく青く
計り知られぬ

35



友を悲しむ

友にして同僚なる繁野天來君の重態に陥れるを、慶應病院に訪ふ。

さし覗き顔見に來ぬとわがいへば見てくれよ
とぞ眼をあげにける

死ににける山口の分ぶんも爲せよといひかする言
葉いひさしにけり(山口は剛君)

人目盗み我が書きし物讀みぬと君が愛娘まなむすめわ
れに告げける

言かはし別れける夜に惜しむべき天來てんらい繁野まなむすめ政まさ
璃るの死ねる

富士の裾野の鳥

雑誌野鳥の主催にて、會衆と共に
富士の須走の山林に、野鳥の生活
状態を観る。

路に田植を見かく

富士近き山田の畔あぜに憩へるはその田植をへ
し一家の人か

植ゑをへて人見やりをり薄緑水に漂ふか弱な
る苗

下の田はまだ踏み終へず榛はんの木の若枝わかえだ青く水
に撒まきたる

刈敷かりしきの榛の青葉や田に下りて泥深くしも踏み
入れて見たき

田植する人をし見ればゆくりなく親しさ湧き
て聲の懸けたき

野鳥の巢を見歩く

笹の葉を擽ぐれば目に入る小瑠璃の巢あない
みじやと息呑みて視る

直土に葦の枯莖粗く組むあはれなる巢にいみ
じやも卵

空に住む鳥や生みける深緑あてなる球の並ぶ
とぞ見る

松林穿つ小路の路の縁あを笹の葉にその巢の
隠れぬ

立枯れの老木おいきの洞ほらの小鳥の巢わが近づくに雛
口あくる

巢の中に押合ふ雛の目はあかず口仰向けて大
きくあくる

いとけなき者のあはれさ雛どもよ早く目をあ
け羽根はやし飛べ

山林の鳥聲

雪残る富士の裾野の若葉占め啼き遊ぶ鳥に我
もまじりぬ

薄曇り若葉明るき空に満ち亂れても啼く鳥の
聲かも

われ圍む若葉にまじり郭公かつこうとほととぎす啼く
耳近くしも

44

薄緑疎らなる葉の空に揺れ近くさやけき慈悲じひ
心の聲

艶帯つやびて短く啼くを鷹と聞き姿を描く松暗き
空に

牛込榎町

吉江喬松君とそこを過ぎることありて

牛込の榎町えのきまち行きて老いし我等思ひ遙けく言葉
の絶えぬ

ここに居しは三十年の前なりと言ことにしていひ
共に驚く

45

獨身どしんのひそかに夢をはぐくみてほほ笑み合へ
る家よ今無し

46

その上かみの我等知る者は此所に居じよくも生き
しよと變れる町見る

無花果

故山口剛君の住みし隣家の無
花果の木、初めて果を持つ。

山口が植ゑて去りける無花果と誰れ知るらめ
や見るは我のみ

幼くて親しみし木の無花果を井戸端を撰えりて
植ゑにけむかも

47

植ゑし日は苗なりけるを我が軒に繁る無花果
今年果をつく

紫に色づける果の十ばかり見て喜ばむ人は世
に居ぬ

埼玉の農家

山下清氏に伴はれて、飯能
に近きその生家に遊ぶ。

客人となりて我が行く西武藏友が生まれし由
ある家見に

大きな家の這入狭めし野菜畑山午莠暗し廣葉重
ねて

古へを今に留むる板敷の莫塵しける間に招ぜ
られける

仕來りの酒の肴の精進揚大井もてふる舞はれ
たる

蕎麥に添ふ茹でし大角豆の青きをば珍らしみ
ては汁つけて食ふ

主人父子刀自嫁身うち出で揃ひもてなしくる
る客人か我

老主人つつまず語る家の運立ちなほりけるそ
の上の事を

落ちつきて言葉少き若主人恃むところある人
とし見ゆる

この家に童なりける日を語り童めくなり頭禿あたま
げし友

川崎杜外を憂ふ

重態を知らずる手紙人に書かせたどたどしく
も署名せり杜外

この十日とまらず出づる血を見ては堪へぬ命
と我に知らせけむ

その知らせ讀むにと胸も衝かれては雨降る空
をただに見上ぐる

54

生き死には一に壽命なり靜かにも病苦を避け
よと文字もじに書きにける

又

蒸暑く永きひと日の暮れむとし亂れて動かず
嵐孕む雲

打續く炎暑に我の衰へて無かりし物を目に見
たりけむ

八月十六日杜外死す。辭
世となれる歌を讀みて。

55

さみしさを抱きつつ死ぬと歌に詠み川崎杜外
死にゆきにけり

長野まで行くとも今は逢はれずと杜外を戀ひ
て大き息を吐く

南 武 藏

晩^{おぐ}稲^て田^だの黄に照る穂田を繞らすや晴れて雲な
き秋空の裾

秋空の裾に沈める一すぢの白雲ありて溶けな
むとする

黄に照れる穂田に音して眼に近く眞黒き鴉飛
び立ちにける

58

舞ひ立てる撓羽の鴉吹き落ちて穂田亂す風に
翼撓ます

村遠く穂田に隠るる大き池人ひとりをり釣を
ぞ垂るる

浮子^{うき}見つめただに立ちたる岸の人ひた心待つ
事や樂しき

人見えぬ穂田のなかなる一つ家白き雌^め鶏^{どり}の雄^を
鶏^{どり}さいなむ

又

59

たまたまに家離れ来て親しきどち物をし食へ
ばかくも楽しき

廣き部屋に満ちてももの食ふ人の卓蟹の甲羅の
赤く亂るる

松 茸

故里ふるさとを偲しのべと添そへる新木箱あらきばこ香の漂あひて松茸あ
らはる

口に湧くほのかなる香に浮び來る木昏こぐれに並ぶ
赤松の幹

野の寺

野の寺の御堂みだうに到る路挟み續きて長き白萩の
はな

高やかに咲きて撓める白萩の花こぼしたりそ
の下土に

寺庭のささやけき家障子閉し井戸端に光る二
つ三つの茶碗

秋空を後うしろに持てる大き屋根勾配ゆるく清すがしや
も御堂

大き御堂紙の眞白き明り障子日ざしに遠く閉
め續けたる

伊香保

榛名山湯の湧く一尾慕ひては紅葉に籠もる家
群に來ぬ

蔦紅くからみ上れる樵を透き遙かに光る雪置
ける峰

道中の引湯の管の蓋の上に長々と寝て目あか
ぬ犬かも

人の庭通りぬけつつ蔦紅く這ひひろがれる壁
を見あげぬ

流れ落つる湯尻の湯氣か紅葉あかき谷より立
ちて白く漂ふ

伊香保神社

榛名の山日に向ふ面を頷きて紅葉にいます遠
代の神かも

石段の高き昇れば廣前に夕かけてあそぶ山の
女童

山に来て見やる子持の頂を赤く染めたる夕焼
雲かも

深き谷に向ひて下る宮の路猷燈ともれり空の
明るく

やせをね峠、見晴らし臺

青空に秋風涼しわが心飛ぶやあなたのうねれ
る山に

秋山の相重なれる峰々のさやかに見えつつ青
空に紛る

紅葉低き御厩谷を見おろして素焼の土器力こ
めて投ぐ

わが手放れ空にきらめく土器の落ち行く谷や
紅葉の廣き

榛名山頂

高山の頂に来て蒼き湖空にむかひて開けたる
見る

山上の湖をめぐれる岩山のあらしき岩肌紅葉燃ゆる

高山の頂に立つ幾岩山烏帽子鬢櫛とその名あはれなり

丈低き穂薄寒しものあらぬ空に突き立つか黒き岩山

蔓ながら採れる通草を籠に満て湖風寒く山の
姫立つ

榛名神社道

我が行くや皆紅の岩やまの迫りてうねる谷の
岨道

岩山を皆くれなるとする紅葉照る日の寒く耀
よひ静けし

72

高岩を離れて空にひろがれる眞紅の紅葉見る
目に揺るる

榛名神社

岩谷の木下の路を深く来て澄みとほる笛の音
にし驚く

老杉にまじる紅葉のさし照らすみたらし清く
身にしみとほる

いにしへの山人と我があふぎ見る神にましま
す奇しき大岩

73

太刀抜き放つ
笛の音にもつれつつ舞ふ
榛名巫女小暗き殿に

霖雨晴る

空を見るは八月九月ふたつき二月にただ二日のみのそ
の空眞青し

晴れ渡る空をし見れば逢ひたくて逢へる人か
もただに笑まるる



めづらしく晴れ渡る今日をたまたまに暇ひまさへ
持てりいかにかも過さむ

深大寺

神代村

清き水に大根だいこん洗ふ女ゐて初冬の野のあかるく
廣き

横山を北に負ひたる一つ村老榭葉なく冬日明
るし

その二

登りゆく岡を劃りて照る紅葉空の落ち入る紅
葉の上に

わが立てる紅葉の岡を真中にし照りて涼しく
四方に垂るる空

堤の上に植ゑつらねたる白き菊見あげ怪しむ
空に浸るを

眞向ひて歩みを移す照り渡る紅葉と葉間のき
らめく空に

深大寺
深大寺
深大寺

岡を背に湧く水豊けき一廓池に流れに川藻の
青し

川藻ゆりて清水流れゆく楓林紅葉さみしく水
車の音す

山門の萱厚き屋根に傾きて老いたる楓暗く紅葉す

秋の庭一葉とどめず水光る彼方の池に人の手
洗ふ

岡裾にはなれてならぶ大御堂渡殿長し紅葉の
下に

鉦鳴らし僧が鎖はずす御厨子にし釋迦牟尼佛
のおはし給へる

天平の遙けき代より斯くしもや歳その人の拜
みまをしけむ

昭和十年

長歌 二二
短歌 百五
首

浦 賀

榎本えのもとが五稜廓ごりやうかくに據りし軍艦いくさぶねか今は刑務所けいむじょとな
れるといふか

國くに啖くわんふ鬼おにかと怖おそぢぬペルリ飴あめペルリ煎餅せんぺいと親
しやもその名

ペルリより貫へる物ぞと水兵が食物しよくもつを煮る大
き鐵釜

小 著

感胃に堪へて『江戸名歌選釋』を書ける頃

痛き頭かしらこらへつつ物書きつづけ手もと暗きに
顔あげにけり

もの書き倦みわが眼あぐればガラス透き音なき庭に雪亂れふる

ふる雪の小暗き空に聲迷ひちちちとしも雀聞ゆる

或時

まことにも我を愛すかと押し返し問はしし基督の心に泣かる

無くてならぬ飯と汁とを分ち合ひ食らふ心を持ちたりや我

『川崎杜外歌集』を讀みて

さやかにも杜外の全貌見ゆるなり人の全貌は
さみしきものかも

亡友

松本中學校の一學年の時、同級なる
松森英代、新村龜一郎の兩君と連寫
せる寫眞、物の間より出づ。

氣の合へる松森新村若く死に三人の一人我の
生けるのみ

暗き顔せりよと見つつ青年の心は悲し見ぬ如くしぬ

92

青年の臆病よりぞ胸披きものいふ時のなくて別れける

事となきさみしき心文字となし逢はむよ友と書くに死にける

病 臥

肺炎を病み、二月より三月にかけての一月餘り、全く床上のものとなりて過す。

十日餘り下りを見せぬ檢温器出さるるままに腋に挟みぬ

93

音寒く廂にひびく冬の雨わが大骨おほほねに染しみ入る
らしも

94

目覺ればわが室へやにある電燈の光うるさく目を
つむりけり

夜廻りの遠き拍子木耳を刺し逸それよと思ふに
近づき來たる

飼犬の吠え立つる聲身に應こたへせむ術すべなきに枕
返しけり

味の無きいささかの物食ひをれば身の衰へて
汗にじみ出づ

肺炎にて死ぬは樂らくならずと我が知りぬ知れど
もかひのある事ならぬ

95

病ゆゑ意地悪くしもなれる我の我と知らぬを
家びとの憎む

人を厭ふ日つづく

わりなきは身の衰へか人が言^{こと}厭はしと聞くに
やがて熱の出づ

その聲に誰と知る人聲潜めものいひをるが襖
越して聞ゆ

熱あれば會^{あひ}はじといふに訪へる人用いひつづ
け歸らむとせぬ

人に會^{あひ}へば熱の出でくる身なるゆゑ會^{あひ}はじと
いひて憎まれにけり

折柄、教員には試験期なり

明日までに讀まねばならぬ答案を我が枕べに
運ばせにけり

電燈の球とりかへて明るくもなりたる室へを喜
び目つむる

人々、果物を呉る

贈り主の面影うかべもぎ立ての大き密柑の皮
剥むかむとす

熱ありて渴ける口に甘酸ゆくしむる密柑の汁
をむさぼる

パイヤの嚙むにほのけく立つかをり再び嚙
めば喉に消えにけり

人々、花を呉る

温室の桔梗のつぼみ紫のはしけむとする時に
切れるか

温室の桔梗の花の濃むらさき春深き夜の灯か
げに照れる

温室に咲ける白百合花びらの細き撓しなひの見る
にあはれなり

フリヂヤの白くかよわき此の花は土に咲かし
めて朝露に見む

白ばらの照れる花びら重なり合ひ傾き咲ける
見る目に餘る

菜の花は瓶に見るべし品持ちて二莖三莖黄に
うち煙る

直立てる若枝につける白桃の蕾の一つふくら
み切れる

枕屏風立てて目つむる枕べに友が据ゑける君
子蘭の鉢

鉢に餘る君子蘭の葉や咲ける花や見れば瞬か
す移せ彼方に

人に逢ふ

立ち膝して我を見おろす岩本のいひたき叱言
早口にいふ

衰への見えずよと岩本口にいひ眼ざし鋭く我
を見つむる
健けき顔せる甥の笑み設けて寐るに飽かずや
と我を憐む

一月を寐て起き難くしたる身の頬の皺深く白
髪伸びにけり
病み上りの朝茶のうまく音立ててすするに浮
ぶ世にあらぬ顔

屋内やうちより廂かすめて見ゆる空今日いちじろく
耀き帯びぬ

だるき身を起して坐れば中空に照りて懸れる
薄雲のあり

屋根瓦かわきて白く續けるに抽ぬけ出でて動く
春の竹の葉

屋根瓦つづける末に一すぢの白き煙立ち空の
霞める

今は寐むと火鉢にありて思へども體からだだるくし
て動くにもものうき

噫逍遙先生

二月晦みそか春來ぬと思ふこの日しも逍遙先生逝か
しまししか

行き行きて止とどまるあらぬ大き人み魂とどめて
世を去りましぬ

双栴舎に見をさめしける先生のみ顔の尊さ友
の來て語る

衆議院院議をもちて此の日しも逍遙先生の文
勳を讃たふ

熱海には行き難かるも青山には推してと思へ
り我が足歩めず

逍遙先生七十七の齡もて休みまさぬをこの眼
もて見たり

110

先生を思へば我よ死ぬるまで果しはかぬる負^{おひ}
債持^めつ身ぞ

子病む

長男病に罹り、容態輕からず

いささかの物音するに胸をどり我にもあらず
起ち上り^{あが}つも

111

家の内うろろう歩き庭に下り竹箒取りてわが
掃きいでぬ

我がこころ紛れよと思ひ本見れど文字の並び
の續きは行かぬ

親としての心盡せるこの子なり残る心は無し
と思はむ

諦めの我には附けりと思へども子に附くるこ
とは苦しくぞある

氣の腐り引き立てむものつつとむれど齡は悲
し甲斐のあらぬらし

人が笑ふ聲聞きつつも我が聲は忘れ果てぬと
心づきにけり

年老いて子に病まるるはつらくありと父のい
ひにきつらくおはしけむ

又

憂へ持ちて路行きつつも八重櫻咲くとしあふ
ぐした下行く時に

花持てるかそけき草にふとしては寄らむとぞ
する心を憎む

日毎見し庭の植木の打光り茂りきたるを今日
認みとめけり

我が世過ぎたやすくあらず梅雨つゆ近く疲れ極ま
りて熱出でにけり

眼閉づれば晝さへ眠く手も足もばらばらとな
りて抜けしが如き

又
父母はただ病を憂ふとさとしける聖の語心に
應ふ

己が子は病むなと思ふ愚かしき此の親ごころ
聖のうべなふ

兩親に子なりける我の親となり子あまた持ち
て思ひ繁なり

櫻

眼の下にひろがり續く屋根を抽きほの白き櫻
空に盛りあがる

櫻花咲く東京を低く覆ひ四方をかざる今日の
霞かも

千 川

板橋なる千川堤の櫻を觀に、岩本
素白君と行く。

春の草かぎれる川の長くして眞白き花の照り
つつ流る

春の川すべて花なり眞白くも流れに流れ盡き
むとはせぬ

丈低き青麥畑の畝間畝間散りてたまれる櫻の
白き

花ふぶき青麥畑の空掠め光りほのめき亂れて
隠る

菜 莢

なつかしみ庭に植ゑにし田植菜莢深紅なる實
のこぼれなむとす

田植菜莢あかき梢を見上げゐる童目に見ゆ朧
げにしも

子が命日に

死にし子の年數ふると笑ひけるいにしへ人よ
我も笑へかし

梅雨期

身の疲れ事し難きに暇得てわが
眼向はしむ縁につづく庭

梅雨ぐもり庭の本草にけむり合ひ眞晝を暗く
灯つけにけり

梅雨つゆぐもり眞晝暗あかりきに灯つけ降れよ今はと下
駄はきて出づ

から梅雨つゆの頭かしらを重み伸びて暗き庭の躑躅つとむを刈
りつめにけり

梅雨つゆ雲ぐものけむれる庭にあらはれて黒く大き蝶
ひとりゆらげる

梅雨つゆぐもり雨となれかし青桐の葉だにゆらぎ
てむし暑さ逐へよ

その二

低き緑抽ぬきて咲きたる虎の尾のうす紫のまぎ
れなむとす

ゼラニウム一花^{はな}あかし草の葉の緑みだれて
重なる中に

開くやと見るに桔梗の紫の蕾ひらきぬ梅雨^{つゆ}の
晴れ間を

目を寄せて見れば夥し雪の下蔓のさきざきに
持ちたるその子

シクラメン鉢に咲く見れば眼に浮ぶ下野^{しもつけ}の山
の岩鏡^{いはかみ}の花

その三

柿の葉の暗き緑の光り出て曇りくる空に雀音^ね
を撒く

苳り込みし藤たちまちに蔓伸ばし棚に餘りて
空にゆらぐも

高槻の圓くも空に張る若葉ゆらぎにゆらぎ我
が憂へ奪ふ

雨に濡るる椿の繁葉しげはつめたくも打光る見つつ
歩み近寄る

その四

梅雨晴れの目のきらきらし見ゆる物俄に豊け
く際やけきかも

清らにも静けき花と瓶かめに見る三莖四莖の投なげ入いれ
の菖蒲あやめ

莖も葉も花も愛でたし瓶にしてその處得たる
菖蒲とわが見つ

その五

梅雨曇る夜の眞闇の底に起る遠音のラヂオも
の狂ほしも

梅雨ぐもる眞暗き夜をひとりゐて足に感ずる
板縁の冷

梅雨ぐもる夜の闇深し身に近き土のにほひに
浸りも行かむ

梅雨ぐもり夜の眞闇したまたまに風來て觸る
れば我ありと思ふ

姉

わが年は父に迫りぬ髪白き姉が齡は母を過ぎ
にけり

來年らいねんの事はわからず親の日をせばや共にと姉
にし我がいふ

まさしくも母の形見と見ゆる姉わが顔を見て
謀るに答へぬ

金

わが友の逢へる喜びする話おのづからにも金かねにうつり行く

錢のこと友の語るに我もいひ歎き合へれど慰むとあらず

交るに難しと我の避けをれば世に富人とみびとはあらざる如し

金持つと聞けば即ち善からざる人かと思ふ眼に見ぬ人を

金かねのいることはあらずと思ひ定め忘れてあれば豊けきに似たり

友

歌讀みて人を思へる筑前の坂本眞鈴マサネのゆくり
なく來ぬ

遠く來し友と喜べ顔見する間まよりはあらぬ身
とぞいふなる

はるばるも手に提げて來ぬ傍に置けよと眞鈴
の人形くれぬ

その子取ろと覗ねらふ唐子と取らせじとかばふ唐
子と隠るる唐子

再は逢ひやすからぬ友を送り暗き夜の路に相
別れぬる

舊

友

恙なくありしやと逢ふに先づも問ふ命危み生
くる如くに

稀にしも聞けば舊知の幾たりか既に世になき
人といはずやも

生き過ぐる我らなるかと我がいへば朗はからに笑ひ
友のうなづく

晩
涼

夕風の縁に涼しく吹き入れば籠の鈴虫聲引き
て鳴く

我が飼へる鈴虫鳴けば聲應へ隣の家より續き
て鳴き出づ

木下よりあふぎ見すれば暗みゆく青葉の隙に
澄める夕空

電燈の遠き灯うくる草の葉の土に這へるが皆
揺らぎ出づ

我が心一つの事に集めをれば膝のあたりに涼
しさ湧き來

疊這ひて顔に觸れ來る晝の風瞑りたる目を開
かむとはせず

卓圍み笑ましく夕食くひをれば耳にさし當り
蝸の鳴く

杜外の歌碑

川崎杜外の歌碑、生前に望みし如く、
松本市外蟻ヶ崎、鹽釜神社境内に建つ。

我が歌碑を立ててくれよと死に近き杜外の弟
子に頼みしと聞く

我が歌碑よ生まれし村には立つるなと言ひ添
へし杜外が心悲しむ

144

死に行きし杜外あはれみ故里人いひしが如く
歌碑立つるとぞ

薄川^{すしきかは}流れに獲たる清き石の大き石に刻む杜外
が歌を

歌の友千隈^{ちくま}が仕ふる宮の内に所得て立つ杜外
が歌碑かも(千隈は大澤氏)

もの喜びすなる杜外の有難し忝しと笑顔して
やゐむ

145

雨 久 し

土用明け十日餘りを雨つづき素足つめたく疊
しめれる

夏木立くらき蔭より蝶の出で雨に濡れつつ漂
ひきたる

ふる雨に翅つばさぬらして夏花にすがれる蝶よ腹へ
りてゐるか

ふる雨に氣をくさらして籠りをれば久しく聞
かぬ蟬の鳴き出づ

みんなん蟬幼き聲に鳴き出でて忽ちやめば雨
の降り來る

軒近き青桐の木に来て潜み舞ひ立つ
椋鳥聲鳴きにけり

子供らは映畫に行けり雨空のわびしき見やり
枕引き寄す

四 萬

子供の二人を伴ひて、上州四萬温泉に遊ぶ。

四 萬 川

四萬川の廣き河原の白浪のこの隈に見れば皆
我に向ふ

四萬川の釣橋行くと見おろせる瀬瀬の白浪音
のとどかぬ

150

薬師堂

山裾の小さき御堂みだうや萱屋根に根を置く木あり
青き枝張る

寺亡びあはれに残る薬師堂佛ほとけ國寶とならせた
まへる

願ねが懸くる願果ねがしたる文字書きし杓子數知らず
薬師堂の壁に

佛まさぬ保護建築の薬師堂茶を賣るばばの赤き
火おこす

151

山清水口つけ飲むに心動き水いぢりたくしや
がみ込みにけり

あぐら搔く膝をめぐれる山の草細かなる葉の
皆揺らぎたる

鳥の聲かすかにすなり谷深く煙る緑のきらめ
き渡る

岨道に腰おろしたり眼の前の檜の小枝に蟬の
鳴き出づ

たまたまに山の木漏りて日のさせり赤き蜻蛉
ある二つ三つさへ

山清水口つけ飲むに心動き水いぢりたくしや
がみ込みにけり

山清水ながれを堰けるこの岩よ動かし移して
變る瀬見むか

山清水ひたす手先のこごゆるをこらへてをれ
ば快きに似る

父われの動かしかねてゐる岩に笑みつつ寄り
來て子の手を添ふる

夏山の暗き木下の路ゆかし千翁の紅空木のむ
らさき

木洩れ日のさすにほのめく岩の面の細かなる
苔の類多き苔よ

本草を愛する娘花を摘みその名教ふる忘るる
我に

山の路ここに窮まり直向ひたむかふ巖のここしとどろ
くは瀧か

岩山の頂にしも躍り出て眞白き瀧のくらき谷
間に

岩山の肌傳ひつつほの白く立つ虹潜くぐり落つる
瀧長し

踏みしむる岩の眞下にとどろける瀧壺見むと
暗みき見おろ下す

落つる瀧とどろき鳴るに谷の空覆ふ桂のゆら
めき渡る

河原湯

朝

戸障子をあげ放ちてはい寐し夜の白み來る空
の小鳥の聲かも

すがやかに山に鳴けるは駒鳥か葉廣桂ひろかつらの空を
さへぎる

夏山にかかる夜の雲明け來れば耀き出づる我
が眼に近く

夏山に夜よるを沈める白雲の崩れつつ消ゆ明け行
く空に

浴室

階段の五つ下り來て我が入るや肩沈むれば溢
れ落つる湯に

浴室の窓低くして夏山の峽行く流眼につづき
たり

手をやりて我が肩揉めり浴室の窓にあたりて
山の大きいなり

湯の越ゆる湯槽の椽に首のせて上らむとする
我が子に聲かく

夜

かかる闇のあるを忘れぬ上下四方一つ光の眼
に入るあらぬ

闇の底に一点の灯のあらはれて瞬またたくがありた
だに見守る

曇り夜の眞闇の底の深きにし落ち入り籠れる
河瀬の音かも

くもり夜の眞闇の底に煌めける灯に飛びて來
ぬ翅はば青き虫

怪しみて子ら我に問ふ夜の山に鳴きて間近き
泉の聲

時 雨

散りしける楓の落葉の雨に濡れ黄に照りつづ
く我が朝路に

老黄楊おいっげの繁しげみに秋の雨ふれり枝に目配くはる一羽
の雀

老黄楊しげの繁は葉はもり來る雨光り雀身を細め枝移
りする
とたん廂しぐれか來しと我が聞くは夜よるをちり
みる楓の葉ならむ

豊島園

登り行く岡にひろごる秋空の澄みの深しやあ
らら老松おいまつ

見まはす四方ほうに空の裾のあり秋の光の溢れて
揺るる

木の間より音立てて出づる秋の川渡らむとし
て低き橋に立つ

秋の葉の赤き乾ひ反ぞり葉山はなせり火を放ちては
燃え立つ見たき

秋の池枯れし水草みくさのさび果てぬかすかに鳴れ
る水よ何處いづこに

獨り者あなたに見やり夫婦猿子猿引きつけ日
當りにゐる

168

雌の猿に蚤とらせつつ雄の猿は手をさし伸べ
て子の猿あやす

まじめなる寧ろ險しき眼せる猿四つ這ひとな
り尻擡げ來る

巢を持たぬ五六の兎かたまりて重なり合へり
秋寒き檻こゝろに

長き耳立てて何をば聞くや兎秋深き園の鳥の
音もせぬ

169

或 日

病院に行きたる子等の聲笑ひにこやかにして
歸り來れり

とろろ汁する音つづく臺所幼きわれは故里に
住みぬ

友と語る

相逢へば明るき目して笑ふなり我ら老いては
包む事の無き

論あけつちふ何のあらむや生まれ來て我が顔長く君が
顔さる圓し

註釋書

佗びしさの處しよし難かるに文ぶん綴り校正の赤あか字書
きつづけつも

抄はかゆかぬ物書きをれば我が庭に楓かえでのもみぢ葉
間なく散り來る

本の文字もじかすみきたるに瞬まじけば頬ほに感じて涙
の流る

細さい字じ出れば擴大鏡を取り上げて覗のぞき見つつも
今は歎なげかず

疲れ過ぎ夜よを寐ねつけずゐる我に闇くらに浮うびて文も
字じの見え來る

この用の濟まばと思ふに空寒く夜は火鉢の要
る時來りぬ

信濃柿

郷里より信濃柿を贈らる。薬指の指頭
ほどの大さにして、熟して色漆の如し。

幼目をさなめにあふぎ見つつもほしがりし信濃柿あま
た箱に入りて來ぬ

幼くて旨^{うま}しやと食べし信濃柿同じ様せり今も
旨^{うま}きか

旨^{うま}かりし記憶なつかしみ信濃柿指に摘まみて
食ふをたゆたふ

眞心

眞^ま心^{ごころ}を持ちたる人の幾たりとわれ世に生きて
交るを得ぬ

眞心を持ちたる人と對ひをれば心和^{まご}みて親と
在る如し

富みたりと賢しと聞く人にして眞心持つは稀
らなりけり

牛
肉

卑しき事いふと笑ふな、思ひ出せばいひたく
ぞなる。ぽつと出^での田舎者の、ものいへば笑
はれし頃、時たまに食べにける、牛肉屋のす
き焼の味よ。その味の口にしみつき、今も猶
忘れずあり。東京の名ある食べもの、一わ

たり口にしけるが、あれ程のうまき物には、
その後つひに出逢はず。思ひ出して戀しがり
ある、その頃の牛肉屋のすき焼の味よ。

友に寄す

文藝の名に隠れて、貴族趣味にあこがるる人
よ。我は思ふ、文藝とは貴族の心を持ちて、
平民の道を行ふものなりと。正直に、率直に、
有りを有りとし、無きを無きとし、入用を捨
ひ、不用を捨て、平易なる言葉をもて語るべ

きなりと。此の心人に好まると厭はると
は問ふ所にあらず。我はただかく信じ、かく
行ひ、足らざるをこそ恥づれ、いまだ疑ふ事
を知らず。

歳末に

貸借かかにかかはり持てぬくらしせり師走の日さ
し疊かさねに明るき

困り話つぎつぎ耳に聞えくる聞けば苦しく思
はるる人に

除夜

年越の飯なり食べよ食べよとぞ子等に強ひつ
つ我も食べける

東京の年越の蕎麥さみしみて我が家はひそか
に牛の肉食ふ

大年おほとしの信濃の家や幼きら鰯いわしと膾なますに笑わらがほをす
るか

ラ
ヂ
オ

全国の名刹に鳴る除夜の鐘我が民族の聲と聞
かむか

昭和十一年

長歌二百五十首

元
日

年の神ここにおはしませ稲作らぬ我にはあれ
ど米さはに賜へ

めでたかれと數多の人の我に書く祝はざらめ
や我もと書き繼ぐ